



北海道札幌

奥平大守

八田三郎

兼
必
親
展

紙

十一月十日



大阪市西區南堀江通壹丁目
勝本忠兵衛

お五十日出るお新お見供
登心健容の心有如上
州一七先月以東遊程

取之神の心と且つ其俗
習、迄立こられ好き
讀書も出来ぬ為めに

神陸衰弱し穢りし
初、親印と比喩と
諷ふ能く本人も是

此出急げ此希道と
之以尔実と心生世了

神株立一町賢職矣と劇勢

能遠常勢と時位

株主一班

體 賢 賦 矣 之 劇 勢

： 維 垣 常 勢 之 辭 任 所

一 子 言 明 所 小 子 故 事

ふ 故 事 の 必 要 有 之 故

日 中 之 別 存 漫 象 之 出

急 々 の 申 々 々 之 不 在

中 間 一 の 用 子 也 有 之

の 事 々 々 之 有 之 故 也

當 時 々 々 之 有 之 故 也

元 氣 也 有 之 故 也 有 之 故 也

如 物 文 亦 往 の 義 太 丈

人 秋 浮 瑠 璃 之 終 白 見

物 也 而 白 かつ た 之

申 居 之 別 々 大 一 故 事

物由 面白かつた

申度は割と大した事

此之は案何事か安神

を以保し嘖々書面を

大難境伏す事歎か

叔父合社拂込の件

心身の関係の事

已に拂込の事

鳥居氏 沙石 株分 五十両

高柳如新氏 市 株分 二十両

去先方より拂込の件

於此之為め今と換へ置

以長秋長分受け先

拂込の事と何れも未だ却

て如くとの事と何れも申

小長秋女分文け先

拂止まんとあつてまを却

てあふと何のまを握り申

実を心生の静任をさす

初念の云ふまの相柳と底

リ其の何お感情の起

おも合おも虚心坦懐

とあえ拂止る付しむ

可執考しあし心をも生

静任以来鳥居女と中

心と一と清言遊語中

得木熾んとして衆を礎

実ある人の言のあれを

心をかた如くも尋ねる所

に居るかの探言のふらし

底の起聞帯は聞と腹

心をかたしめ、罪を清く

居るかの、探さぬ、ふらし

居る趣、聞かば、聞かば、腹

面、向から、心を、せむ、事、方

より、心して、構は、事、必

要、あ、く、と、あ、ら、ず、打

撰、て、置、て、申、し、偏、し、先、方

一、点、構、は、し、み、と、頼、ま、と

便、に、依、り、あ、れ、を、快、徳、の

考、ら、し、ま、ん、去、る、上、の、鳥

居、て、未、定、有、る、少、年、を

一、寸、如、け、構、持、り、あ、ら、ず、と

此、字、も、あ、ら、ず、あ、ら、ず、と

此、一、と、あ、ら、ず、構、持、任、せ、あ、ら、ず、と

鳥、居、て、あ、ら、ず、一、と、あ、ら、ず、と

東、京、の、井、出、の、意、あ、ら、ず、と

此一、高橋押任せり

鳥居氏と此一、新し

東宮の井出と悪あつた

八田と松、書翰の往復

一と此一、候と引出ん

か、實に驚いた今日迄の

事と水一海一と誓ひた

親父と一、此一、お言ひ

この一、ある一、を之と新し

此一と

尋々の感情がある一、

許任と此一とあれを決定的

ではある一、水一海一と

流さぬとが飛んた一、

当方では何とも思ひ

らぬ、此一、お言ひ

悪くせ、此一、候と

各、辨河、捕、此一、

此一、此一、此一、

吾辨河 拂込河

翻し言ふ 編丸おりし

去要信に 此一々まきし

之てられたる 殊果言の損

ね河 何保し

少生 取る心 爲しを先

方より 頼みなる 拂込を

可秘 理由なる ことと考

自如 放任 何志あり 良

策あり 若く 確信付し

先方と 拂込め 是は 絶縁

とは 島居氏も 老兄と

宛られたる 文中に ありし 或

大 弁ふ ありし ありし ありし

當方より 事と 好むと 不ぬ

故に 事初より 感情 同感に

おこ

當方も事を好むと不承
故に事初より感情問題
の事と言明するに不承先^ち
方自身より感情問題
ありたる責任ありと何
鳥居氏を何くも竹ゆの
情、心身の感情を害した
かの極曲解 井出氏も斯く
思惟し居らる、彼あり
七之を技術の問題と見え
又竹ゆも一俣甲人諷心
不足外、之つとと大^{ある}
事ありし今の場合は
早何事も言ふ必要あり
善い構えおけが問題と漸
り、此の事之を先ん

高橋と申すは、
川原のせえのええ
の出候一ツび
と申すは、
しる方をも支
絶録の場合には責任先方と
ありと識者の諒解を得

れを満足とせ
先と近次、
諒解と申すは、
十一月十日

十
山妻
本

八田大之
信